【一発ネタ】私たちが殺した優しい少年の話

剱深弥

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】
彼は心優しい人だった。
他人の痛みを理解できる人だった。
いつだって努力し続けていた。
でもきっと、頑張りすぎてしまったんだ。
だから彼は休んでいるだけ。
少し、眠ってるだけなんだ。

――――これはとあるカルデア職員の独り言。

※ただの一発ネタなのでだいぶ短いです。R―15は保険というかなんというか…。

目次

【一発ネタ】私たちが殺した優しい少年の話 ―――――――――― 1

【一発ネタ】私たちが殺した優しい少年の話

よくよく考えたらおかしなところはいくつもあった。
魔術の魔もわからないようなただの一般人がたまたまカルデアのマスター候補になり、偶然人類最後のマスターになった。
死に逃げることも許されない彼は挫けたとしても立ち止まることなく、必ず前を向いていた。
特異点では何度も殺されかけたし、現地で親しくなった人を何人も亡くした。
どんな恐怖が立ち塞がっても世界を救うための努力を怠らなかった。
普通の人間には到底無理な話だ。
しかし彼は成し遂げた。
彼は世界を救って見せた。
だから勘違いしてしまったんだ。
彼は〝特別〟なのだと。
サーヴァントは世界を救うために自らの意思で召喚に応じた。
カルデアの職員は自らの意思でこの職を選択し、生きることに絶望した人間は早々に

命を絶った。残った人間は人理焼却に立ち向かうことを選択した。
マシュは人間でありサーヴァントでもあるという特殊な立場であり、選択肢もなかった。しかし彼女を一人の人間とみる人も彼女を娘のように、息子のように想うサーヴァントもいた。彼女はマシュ・キリエライトという人間として、サーヴァントとして必要とされていた。
なら、彼は？
何も知らないうちにカルデアに訪れ、彼だけが残ってしまったため、彼は人類最後のマスターという一人の人間とみる者はいなかった。彼はいつだって、このカルデアにいる限り人類最後のマスターとしてでしか存在できなかった。存在することを許されなかった。
彼のバイタルは基本的に安定していた。安定していることの方が異常なのに。
一度だけ、彼に聞いたことがあった。
「人理を守ったあと、何がしたい？」と。
彼は答えた。
「なんだろうな……。特に浮かばないんだけど、あえて言うならみんながやりたいことができたらそれでいいかな」
マシュには青空を見せてあげる約束をしたから吹雪の吹いてない、一面の青空を見せ

てあげたい。それにずっとカルデアにいたんだから、普通の女の子みたいに街に出て買い物とか食事とかもさせてあげたいな。

サーヴァントのみんなには人理修復を手伝ってもらってなんだけど、俺ができることって全然なさそうだよな……。あ、現代社会の風景とか見せてみたいな。みんなが過去に存在したからこそ今があるわけだし。

職員さんもずっとカルデアに閉じこもってるし、人理修復できたら思いっきり寝て、食べて、遊んでほしいな。特にドクター。徹夜するし運動しないしネットアイドル追いかけてるし。

と、そう言ったのだ。

彼はもう、彼自身の望みも言えない。わからない。

心を偽り、身体を偽り、彼は彼自身が気づかないうちに彼という人間を壊した。

私たちが藤丸立香を殺したのだ。